Opning

<　１９９９年　7月7日　朝　>

Opning　　雨の惑星

そして、誰にでもやさしいから残酷な子供たちの物語り

　守が入ってきた。街路樹の窓に紫陽花の雨が降っている。たぶん、この雨は梅雨の長雨に違いない。

　そのとき、れいは教室の窓ガラスに唇の先を押しあてて、向い側の予備校と彼女がいる学校の間にある細い通りを眺めていた。

　トラックが一台走り出した。パッパッと吐き出される排気ガスが街の大気汚染を増大させている。今、この街のブームは大気汚染であるらしい。

　守はドアを後ろ手に閉めた。れいは守のほうに振り向いた。守は手にスケッチブックを持ち、れいにしゃべりかけようか躊躇っている様子だった。守はどこか気まずそうだ。

「おはよう、藤沢くん」

「雨宮さん、おはよう。今朝ははやいね。」

　守はれいをろくに見もせずに、スケッチブックを机の上に放り出した。そして、窓ガラスのほうに視線を向けた。

れいの頭上を越えて、ガラス窓のほうに、広がる灰色の空のほうへ。

　守は全身に受けた雨にずぶ濡れだ。濡れたせいで髪からは雫がしたたり落ち、シャツからは程よく日焼けした素肌が透けて見えている。

　太い眉、柔和だがどこかアンバランスな翳りを覗かせた深くて、黒くて暗い瞳。それでいて、子供が読むファッション誌のモデルを思わせるように整った顔だち。

　その仕草のひとつひとつは、繊細で洗練されている。ただし、ハンサムと言っていいのかはわからない。むしろ、その反対のうわべだけのからっぽなうつくしさなのかもしれない。雑誌の表紙を鮮やかに飾る男の子たちの鑑賞に堪えられる程度のうつくしさのうように。言葉にする必要を、口に出してしゃべること話すことそのすべてがその瞬間に偽りになってしまうということを、それさえもまだしらないうすっぺらな男の子たちのように。たえば、守のみせかけだけのやささのようにである。

　守は白づくめだった。白い服を着て、白い靴を履いている。白い表紙のスケッチブックを持っていた。均整のとれたスタイルで、かなりの長身だ。

　「白い服。雨の日には似合わないわね。」れいは言った。

　守が言う。

　「汚れやすい。絵を描く学校にも似合わない。おまけに、ずぶ濡れだ。」

　「傘は?」

　「途中で降ってきた。」守はこたえた。

　守は話しながら途中で軽く微笑した。その笑みを眺めながられいはまるで四十の男のように疲れきったほほ笑みだと思った。

　れいは窓ガラスを離れ、灰色のそらから遠ざかると、教室の中央へ、守のほうへと歩いて行った。

「藤沢くんってさ、ちょっと卑怯でイヤな奴よね。」
「?　それはどういう意味で。」
「どういう意味もなにもそのまんまって意味だけど」
「どうして?」
「だって、誰にでも平均的にやさしい人だから」
「そんなことはないと思うけど。」
「そうかな。」れいは言った。
「でも、私にはそうみえるわ。誰にでも平等にね。まるで、やさしさの社会主義者みたいだわ。」
やさしさの社会主義者。れいはあえてそう言ったのだ。けっして、博愛主義者とは言わない。
なぜなら、彼は誰も好きじゃないからだ。誰も愛してなんていないからだ。れいにはわかっている。
(誰かを愛するなんて……。)
たぶん、守には一生かけたってできっこない。愛されれば愛されるほど、守は相手から逃げてゆくだろう。そして、逃げるために守は好きでもない相手にも必要以上にやさしくするのだ。自分自身をコーティングするためにである。
はっきりとした根拠はどこにもなかった。
けれども、守の眼差しが言葉にするよりも確かな根拠を物語っているような気がした。
「だから、藤沢くんはクラスでたったひとりこうして私にしゃべいかけられる人なのよ。……ホント、貴重な人ね。」
守は笑った。れいも笑う。いかれたみたいにふたりは笑う。げらげらと。
その笑い声は高くて、廊下にまで響いた。笑い声とほぼ同時に、ちょうど、階段の脇で清掃をしていた職員の中年女性は、笑い声におどろいて思わず足を踏みはずしそうになった。
守はれいから視線を外し、少しだけうつむいて、笑いながら言った。
「それがやさしいってことなら、ぼくはきみの言うとおりなのかもしれない。」
だが、守が顔をあげた時、れいは笑ってなんかいなかった。それどころか、むしろその表情から感じるのはれいの猛烈な怒りだった。
「そうよ。だから、残酷な藤沢くんは卑怯な人なのよ。」